戦争文学としての『海と毒薬』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2019-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 董, 春玲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20011

文学研究論集第50号 '19・2
研究論集委員会　受付日　二〇一八年九月二十一日
承認日　二〇一八年十月二十九日

戦争文学としての『海と毒薬』

The Sea and Poison: from the perspective of war literature

博士後期課程　日本文学専攻　二〇一八年度入学
董　春　玲
DONG Chunling

【論文要旨】

九州大学生体解剖事件を題材にしている『海と毒薬』（『文学界』一九五七年六、八、一〇月号）は、遠藤周作の文壇的地位を確立させた作品と言われている。先行研究の中では、キリスト教的な神の問題をめぐって、日本人の罪や悪を論じるのが主流である。一方、『海と毒薬』は、三回ほど戦争文学全集に収録されているため、戦争文学としても位置づけられるのではないかと思える。こうした立場から、本稿では、まず『海と毒薬』の刊行によって惹起された波紋、つまり九大生体解剖事件をデフォルメしたフィクション『海と毒薬』が出版された後、事件の真相究明を図るノンフィクションが次々と出てくることの意味を考察する。これを踏まえたうえ、『海と毒薬』の創作背景にある戦争責任論争を切り口に、同小説が生まれた文壇の時代状況を明らかにする。さらには、登場人物をめぐる複雑な戦争責任の問題と、作品を通じて表象された戦時日本のピラミッド型の階級構造から、戦争文学としての『海と毒薬』の特質を明らかにしたい。

【キーワード】遠藤周作　海と毒薬　戦争責任　戦中派　ピラミッド型構造

はじめに

遠藤周作は『白い人』（『近代文学』、一九五五年五、六月号）によって同年第三三回芥川賞を受賞し、作家としてデビューを果たした。それから二年後、九州大学（九大）生体解剖事件を題材にしている長編『海と毒薬』を『文学界』（六、八、一〇月号）に発表した。一九五八年、同小説が第一二回毎日出版文化賞と第五回新潮社文学賞の受賞作に選ばれたのを機に、遠藤は自らの文壇的地位を確立するようになった。先行研究の中では、キリスト教的な神の問題をめぐって、『海と毒薬』における日本人の罪や悪を論じるのが主流である。[1] 一方、『海と毒薬』は、東都書房刊『戦争の文学6』（一九六五年）、毎日新聞社刊『戦争文学全集5』（一九七二年）、そして集英社刊『コレクション戦争×文学12』（二〇一三年）のいずれにも収録されているため、戦争文学としても位置づけることが可能ではないだろうか。戦争文学はいうまでもなく、戦争を扱う文学作品のことである。黒古一夫『戦争は文学にどう描かれて

きたか』（八朔社、二〇〇五年）によれば、国家と自分とを重ね合わせ、「国のため」という観念を前面に出して生命を軽視したように見える戦争文学作品もあるが、大半の作品は戦争という「事実」をあるがままに描き出しながら人間の生き方や生命の在り方を考え、あるいは「反戦」を訴え、戦争の悲惨さや絶望がもたらした悲劇を冷厳に見つめたものである。同書において黒古は『海と毒薬』の戦争文学作品としての側面を指摘している。

『海と毒薬』を発表した遠藤は、同小説で描かれた九大生体解剖をそのまま事実として受け止めた事件の当事者から抗議状を送り付けられた。[2] 彼は「はなはだつらかった。私は、この小説によってそれらの人々を裁判する意志は全くなかったからである」[3]と表明したが、その後生体解剖事件当事者は、世間一般が依然として九大解剖事件を誤解しているのは『海と毒薬』にも関係があったと主張している。[4]

こうしたことから見れば、九大生体解剖事件をとりあげた『海と毒薬』は戦争責任をテーマにした戦争文学として受容されていた一面があると言える。とはいえ、読者の受容と作者の遠藤の創作意図とのあいだに厳然たる懸隔も存在している。なぜこのようなことが起ったのか。

「『海と毒薬』ノート――日記より」（『遠藤周作全日記（上巻）』、河出書房新社、二〇一八年）では、同小説は一九五七年三月頃から取材と執筆が始まったとある。一九五七年前後は、後述するように、ちょうど「戦中派」の戦争責任をめぐる論争が盛んに行われていた時期である。座談会「戦中派は訴える」（『中央公論』、一九五六年三月）及び「危険な〝戦中派美化〟」（一九五六年五月一四日付『中国新聞』）、「戦争責任の問題」（一九五六年九月二一日付『産業経済新聞』）などに見られるように、遠藤も論争の中で積極的に発言していた。しかるに、先行研究において、同論争における遠藤の発言はほとんど看過されている。わずかに遠丸立は一九七二年七月の『国文学：解釈と鑑賞』において、『海と毒薬』の主題について、「敵機の搭乗員を軍事医学上の実験材料に用いて殺すというこの作品のストーリーは、すこし見方を変えれば、戦争責任の問題にもつらなる」と指摘したうえ、一九五六年の戦争責任論争が小説の創作に影響を及ぼしたかもしれないと推測している。しかし、詳しい分析が行われず、遠藤が論争のなかで演じた役割にも言及していない。

本稿では、まず『海と毒薬』の刊行によって惹起された波紋、つまり九大生体解剖事件をデフォルメしたフィクション『海と毒薬』が出版された後、事件の真相究明を図るノンフィクションが次々と出てくることは何を意味するのかを考察する。これを踏まえたうえで、『海と毒薬』の創作背景にある戦争責任論争を切り口に、同小説が生まれた文壇の時代状況を把握し、作品に介在する複雑な戦争責任の問題を検討する。さらには、作品を通じて表象された戦時日本のピラミッド型階級構造から、戦争文学としての『海と毒薬』の特質を明らかにしたい。

一、『海と毒薬』の波紋

二〇一八年一月二一日付の『東京新聞』で、「米兵生体解剖　焼きつく記憶」という見出しの記事がある。これは九大生体解剖事件の最後の生き証人東野利夫に取材したものである。この記事では、九大生体解剖

事件が広く世に知られた理由として、「一九四八年、横浜軍事法廷でこの事件が裁かれ始めると、「生体解剖事件」として大々的に報じられた」ことと、「この事件を題材にして遠藤周作が一九五七年に発表した小説『海と毒薬』の影響が大きかった」ことが挙げられている。さらに東野は自伝『戦争とは敵も味方もなく、悲惨と愚劣以外の何物でもない』（文芸社、二〇一七年）のなかで、以下のように書いている。

世間一般の方は遠藤周作氏が書いた『海と毒薬』が九大生体解剖事件のことだと誤解認識されているのは当事件の最後の生証人として私は未だに慚愧の念に耐えられない思いです。

遠藤氏が『海と毒薬』を書いたのは、フランスに留学して学んだ「キリスト教に於ける罪と罰」の思想を恰も九大生体解剖事件の真相であるかのように巧妙に創作したフィクション（作り話）で、当時のマスコミ関係が残虐非道な事件として誇大報道されたため一般の方は未だに『海と毒薬』が九大生体解剖事件だと思いこまれた方が殆どです。

『海と毒薬』は九大生体解剖事件に材を取りながら、事件と異なる次元において人間の内面を深く掘り下げる作品だということは、今日ではすでに広く一般に認められている。だが、東野はあくまで、小説が発表された当時、マスコミ報道の相乗効果で『海と毒薬』はそのまま事件の真実だと誤認識されていたと主張する。この姿勢は一九七九年に書いた『汚名「九大生体解剖事件」の真相』（文芸春秋）からすでに鮮明に打ち立てられている。[5]

実は最初に『海と毒薬』への異議申し立てを行ったのは、東野の先生に当たる平光吾一である。彼は『海と毒薬』の発表直後に、「戦争医学の汚辱にふれて――生体解剖事件始末記――」（『文芸春秋』、一九五七年一二月）を書いて、「戦争犯罪人というレッテルと、重労働二十五年という刑罰を私に下した、所謂九大生体解剖事件（実際は相川事件という）を刻明に描写していたこの小説（中略）を読んだ時、私は全く自分等の古い傷痕を抉られたような心境だった」と述べている。彼はその「心境」を説明すべく、当事者としての実体験を取り上げ、フィクションの小説と異なる事件の真相および戦争裁判の「欺瞞性」を告白したのである。それによれば、当時九大医学部の解剖学主任教授だった平光は、西部軍の命令で米軍飛行士の捕虜負傷者に手術を施すべく、解剖教室を借りたいという石山教授からの依頼を受けた。数人の将校が手術を見学していたことを不審に思った平光は、横浜の法廷に出るまで、それが生体解剖手術だったのを知らなかった。彼は生体解剖をやりすぎだと思っているが、医学の進歩に役立つ面も肯定している。自分が罪人とされたのは日本が敗れたことからだとしたうえ、「勝敗によって勝者が裁判権をとり、勝利者の恣意によって敗者側を裁くことが、果たして正しいか」と米軍裁判に疑問を呈している。

平光論の正否は別として、彼はとにかく自らの冤罪を主張したかったのである。しかし、「当時の社会情勢では、自己の立場を弁明する前に、戦犯受刑者という前歴を怪しまれた。軍事裁判を批判する前に、医師としての倫理をきびしく糺されねばならなかった。まだまだ戦争に対する

悪夢や、ジャーナリストの事件に対する一方的な報道の印象が根強く残っていた[6]」。当時医学部の学生だった東野は平光の研究補助員をしていた。恩師の冤罪を雪ぐため、彼は前掲『汚名「九大生体解剖事件」の真相』を上梓したのである。

このほか、仙波嘉清『生体解剖事件』（金剛出版、一九六三年）、鳥巣蕗子『再審査』（葦書房、一九八二年）、熊野以素『九州大学生体解剖事件　七〇年目の真実』（岩波書店、二〇一五年）などの九大生体解剖事件の真相究明と当事者の名誉回復を目論む出版物もある。事件当事者の身内[7]であるこれらの書き手は、当事者のやったことは悪いと認める一方、日本を空襲した敵国アメリカの兵隊捕虜が当然処罰される戦時中の現実を無視し、そして個々の当事者を完全な悪と見なした戦後米軍裁判の「欺瞞」を訴え、戦争さえなければ、罪人とされた人々はごく普通の人生を全うすることができたと主張している[8]。

そのような考え方は決して当事者とその身内に限るものではない。『海と毒薬』発表の翌年、『私は貝になりたい』というテレビドラマが出て、評判になった。一人の平凡な理髪店主人が平和な暮らしの中から突然戦争に引っ張り出され、上官の命令で心ならずも捕虜虐殺を行った。戦後故郷に戻り、理髪店でバリカンをとったが、ある日突然戦犯として逮捕され、やがて処刑される。そのようなあらすじのドラマが大ヒットになったことは、平和の暮らしを破壊する戦争への批判と、勝者による敗者の一方的な戦犯裁判への批判が当時の日本人に共有されているのを示している。その考え方を持っている日本人はいうまでもなく『海と毒薬』の読者にもなりうる。そのドラマについて、高見順は「戦争責任の再検討　人間の責任所在の問題として」（『週刊読書人』一九五九年一月一九日）において当時の戦争責任論への疑問を呈している。

> 過去の戦犯裁判が規定した戦犯というものには、疑問があるが、だからといって、戦犯というものを全く否定していいかどうか。これは戦争責任の問題ともつながっている。

高見順は当時の戦争責任論への疑問から、「戦争責任の問題は、今までのように、自分には全くその責任がないと考える人々の摘発や糾弾というやり方ではなくて、自分には戦争責任があると考える人々によって、それはどういうものだったかをみずから考えるというやり方において、改めて取り上げられねばならない」と主張している。

遠藤は事件の当事者を糾弾する意志がなかったと言っているが、『海と毒薬』では、確かに集団心理や現世利益で動く登場人物がアメリカ人捕虜の生体解剖にかかわっていることが書かれている。結果として、マスコミの報道とともに『海と毒薬』は、事実の如何にかかわらず、現実の事件当事者を一律道徳的に不利な立場に追い込んだととらえられかねない。

遠藤は、戦争裁判に対する事件当事者や遺族たちの強烈な疑問を予想していなかっただろう。彼等は、戦時中における軍部の兇暴、そして戦後裁判の欺瞞性を強調したため、結果として当事者の被害者としての側面が顕著になる。そうすると、誰が戦争責任を負うべきか、如何に戦争責任をとるべきか、あるいは戦争責任の問題をどうとらえるべきか、な

どはあいまいになっている。それに対し、『海と毒薬』を書いた遠藤の真意は、事件当事者の批判になく、むしろ時代・社会に翻弄された様々な個々人の姿を表象しようとしたことにある。彼はまさに『海と毒薬』の登場人物個々の人の内面を通して、各人各様の戦争責任の問題を読者に向けて提起している。そのやり方はちょうど高見順のそれと相似している。だが、『海と毒薬』における各人各様の戦争責任の問題を究明する前に、その作品に先立つ戦争責任論争を明らかにしなければならない。

二、『海と毒薬』に先立つ戦争責任論争

『海と毒薬』の執筆前後、戦争責任をめぐる議論は活発に行われていた。敗戦から約一〇年、ちょうど日本共産党第六回全国協議会（一九五五年七月）における路線転換とソ連共産党第二〇回大会（一九五六年二月）におけるスターリン批判が象徴するように、五〇年代半ば頃から、共産世界における内部混乱が現れはじめていた。その時、吉本隆明や武井昭夫、鶴見俊輔などは従来の転向論と当時の知識人論の両方に言及するかたちで、戦争責任の問題を取り上げるようになった。(9)

猪狩正男は「激しい怒りをこめて」（『コチレドン』第六号、一九五五年三月）において、戦時中日本の知識人による抵抗はなかったとしたうえ、戦後の世代構成を、敗戦の結果を見てから自分は抵抗したといい、当時の動きを罵倒する偽善の戦前世代と、うっかりこの論調にひきいれられて偽善的知識人たちのペースに巻き込まれている二十代前半の戦後世代、及び前記両世代の間に落ちて、もがいている二十代後半の世代に分けている。そして、鶴見は、「知識人の戦争責任」（『中央公論』、一九五六年一月）で、猪狩の主張した日本知識人の無抵抗に加えて、外部の要素として「階級的圧迫」をあげている。

このような猪狩や鶴見の論議を契機として、一九五六年三月の『中央公論』では、「二十代後半の世代」を「戦中派」と明確に銘打った座談会「戦中派は訴える」が企画された。(10) 大宅壮一が司会をつとめ、遠藤のほか、ＮＨＫの婦人職員、女優、画家、雑誌編集者、高校教師の人々が出席していた。「戦中派とは」、「一番の犠牲者」、「傷は十年後に」、「取り残された世代」、「戦前派よ自己弁解はよせ」という五つのサブタイトルからもうかがえるように、出席者は「戦中派」を主として戦争被害者の立場からとらえている。遠藤の発言をまとめると、彼は「戦中派」を「戦争という現実に目をつぶって、文芸とか美術とか、そういう美しいものの世界で生の実感を味わおうとした連中」、「溺れる者藁をもつかむの心境で、当時の枠に頼りきろうとした連中」と「精神的な疲労に支配されて、どうでもいいと思った連中」に三分していることがわかる。そして戦時中における自身の心境をこう告白している。

> ちょっとしたことに泣いたり笑ったりするような感受性は、戦争のとき、すりへらしてしまったんですよ。実際あのころは、人が死ぬということに対してさえ、無感覚、無関心だった。それが今日までつづいているんですね。

遠藤も含め、座談会の出席者は戦争責任の方向で「戦中派」を議論したのでなく、被害者として「戦中派」はどのようにもがいていたかを披

瀝しているように感じられる。遠藤自身の分類に従えば、他人の死への「無感覚」・「無関心」でいた彼は、まさに「精神的な疲労に支配されて、どうでもいいと思った連中」の部類に入る。

とはいえ、同座談会は戦争責任の議論を惹き起こすことになった[11]。村上兵衛（元陸軍中尉）は同年四月の『中央公論』で「戦中派はこう考える」を発表し、「戦中派」＝被害者から一歩進んで、「戦中派」に戦争責任はなかったし、国家への忠誠義務も許容されねばならないといった見解を示した。村上の尖鋭的な主張について、遠藤をはじめ、多くの知識人は疑問を投げかけていく[12]。例えば、遠藤は以下のように言っている。

むしろ危険なのは戦中派を特に被害者として美化する考え方である。その意味で村上氏がこの世代を勘定高い戦後派と立身出世主義の戦前派の間に入れてともすれば、これら両世代の「裁き手」として置く考え方にはぼくは不満である。たしかにぼくらのみが正しく、美化され得るという意識はなりたたない。村上氏の考え方に共犯者として悲しみがないという荒氏（荒正人――引用者注）の反対はその意味で正しいのである。（傍点引用者、以下同じ）

遠藤は、村上の考えに戦中派美化の危険性をはらんでいると指摘したうえ、自分に責任がないという自己美化ではなく、自分を共犯者の一人として自覚すべきだと提示している。さらに、彼は一九五六年九月二一日付『産業経済新聞』に「戦争責任の問題[13]」を発表し、「戦中派」の戦争責任に触れるようになった。

我々の心のどこかに、戦後の戦争裁判によって戦争責任や戦争の罪の問題は既に処理され解決がついたという安易な気持はひそんでいなかったか。また平和運動や民主主義を行うことによって凡ては償われるのだという感情はなかっただろうか。だが、戦争で殺された人々の苦悩は償われぬのである。（中略）戦争責任の問題はたんに政治的、社会的面で処理しえたらスムと思うのは間ちがいだ。（中略）あの戦争時代に同じ立場におかれたとして、自分が完全な反戦主義として行動しうるという自信を私の場合は、まだ、とても持てないような気がする。

戦争責任は戦後の戦争裁判や平和運動といった政治的・社会的な処置を以て回避できる問題ではない。なぜなら、そうした処置だけでは、被害者の苦悩は償われないし、そもそも戦時中、自身が反戦主義を貫いたわけでもないからだと遠藤が言明している。つまり、彼は「戦中派」は被害者だったという座談会「戦中派は訴える」の立場から、実は「戦中派」は加害者の部類にも入っていたという認識へと変化していたのである。

一方『海と毒薬』の中で、遠藤は一概に登場人物を加害・被害の枠組みでとらえていない。むしろ彼は多様な「戦中派」タイプを表象している。加害と被害のジレンマに悩まされるものもあれば、まったくそれに無頓着なものも存在している。こういう登場人物の間に見られる意識のズレは、戦時社会が個々の人に与えたそれぞれ違う影響を反映するものと思われる。

三、『海と毒薬』における様々な「戦中派」

『海と毒薬』では、西松原住宅地に引っ越した「私」は、気胸療法を受けるため、勝呂医院に通う。やがて偶然のきっかけで、「私」は勝呂医師がかつて生体解剖事件に関係していたことや、ガソリン・スタンドと洋服屋の主人も戦時中人を殺していたことを知る。さかのぼって、戦争末期、勝呂の勤務していたF市医大では、医学部長のポストをめぐって熾烈な権力闘争が展開されていた。不利な状況に追い込まれた橋本教授側は、軍からの支持を取り付けるべく、アメリカ軍捕虜の生体解剖を引き受けた。橋本教授グループに属する看護婦の上田、医学生の戸田・勝呂もそれに加担した。人を殺していたガソリン・スタンドと洋服屋の主人は自身の犯した罪に無頓着である。そして、生体解剖事件に関係していた勝呂・上田・戸田の三人は、必ずしも全員が良心の呵責にさいなまれているわけではない。

物語のはじめに、「私」は風呂場でガソリン・スタンドの主人に出会い、彼の右肩にある傷跡に気づく。会話を交わしていくうち、それが中支で「チャンコロ」の迫撃砲にやられた「名誉の負傷」であること、そして中国戦線では中国人女性は強姦され中国人男性は突撃の練習に使われること、さらには洋服屋の主人が元憲兵で人殺しの経験を持っていることなどを教えられた。二〇一八年五月に河出書房新社より刊行された『遠藤周作全日記』に収録された「新資料「アデンまで」「白い人」「黄色い人」執筆」では、遠藤は講演のため、富田駅に着き、渡辺能成という人に迎えられたことが記されている。

一九五五年一二月一日

ぼくはもとから、日本軍人の死骸ともいうべき男を一度見てみたいと思っていた。つまり戦争が終わったあと、あの職業軍人の下士官的なtypeはどう生き残っているかというのである。富田で発見したこの渡辺がそうだった。ぼくが、彼がもと憲兵少尉であることを知ったのは風呂の中である。（中略）夕飯の時、酒を飲む。この男、戯杯を強要し、しきりと、自分の台湾時代の権勢と、富田工場における位置を誇示する。

実在の渡辺も、ガソリン・スタンドの主人も、風呂の中で自身の戦場経験を誇示するような口調で語っている。『海と毒薬』の中で、恐らく渡辺はガソリン・スタンドの主人として表象されているだろう。残酷な戦争に対して無自覚でいられた渡辺を、遠藤は「日本軍人の死骸」と見なし、批判している。戦後民主主義が広がる中、戦争記憶の風化が進み、まさに「戦争責任の問題はたんに政治的、社会的面で処理しえたらスム」と思われるようになった様子は、以下のように点描されている。

今、戸をあけてはいってきた父親もやはり戦争中に人間の一人や二人は殺したのかもしれない。けれども珈琲をすすったり、子供を叱ったりしているその顔はもう人殺しの新鮮な顔ではないのだ。トラックが洋服屋のショーウインドーを汚していったように無数の埃が彼等の顔に積っている。

昔殺人の罪を犯した人の顔にはもはや埃が積もっている。つまり、戦争責任の問題はすでに忘却の彼方に追いやられてしまっている。こういう登場人物には、遠藤が戦争責任論争の過程で言及した自分のみじめさへの自覚や共犯者としての悲しみは感じられない。

一方、生体解剖事件に関係していた勝呂は、苦悩し続けている。生体解剖手術に臨む勝呂はいざ現場に入ると、「俺あ、とても駄目だ」、「俺あ、やっぱり断るべきじゃった」と言って、手術そのものには参加せず、ただそばで見守っていた。その時の心境は次のように表象されている。

無力とも屈辱感ともつかぬものが急に息ぐるしいほどこみあげ勝呂の胸を締めつけてきた。できることなら手をあげて前に並んでいる将校たちの肩を突きとばしたかった。おやじ（橋本教授――引用者注）の肋骨刀を奪いたかった。だが、眼をあけた彼の前には将校たちのいかつい肩ががっしりと幅ひろく並んでいた。その腰にさげた軍刀も鉛色ににぶく光っていた。

つまり、勝呂にとって、悩みのタネは上司と軍に逆らうことができなかったことである。術後、彼は「成程、お前はなにもしなかったとさ。（中略）だがお前はいつも、そこにいたのじゃ。そこにいてなにもしなかったのじゃ」、そして戦後「あの時だってどうにも仕方がなかったのだが、これからだって自信がない」という内面の葛藤に苦しみ続ける。「そこにいてなにもしなかった」勝呂は、まさに「あの戦争時代に同じ立場におかれたとして、自分が完全な反戦主義として行動しうるという自信を私の場合は、まだ、とても持てないような気がする」という前掲の遠藤自身の考えに通じている。

そして同じく事件の関係者として、医学生の戸田と看護婦の上田の二人は、まったく別な事情を抱え込んでいる。生体解剖手術に臨む戸田の心境は以下のようである。

これをやった後、俺は心の苛責に悩まされるやろうか。自分の犯した殺人に震えておののくやろうか。生きた人間を生きたまま殺す。こんな大それた行為を果たしたあと、俺は生涯くるしむやろうか。

戸田は良心の呵責を受けるか否かを確認すべく、生体解剖に手を貸そうとしたのである。こういう僻んだ心理は彼の生い立ちに負うところが多い。小学校の時、教師を騙したり、中学校の時、標本室の胡蝶を盗んだり、高校の時、従姉と姦通したり、医学生の時、妊娠させた女中を捨てたりしてきたが、自ら反省の念もなく、一度も倫理的な批判を受けていない。だから、生体解剖手術を終えた直後、来るべき世間の罰を冷めた目で見ている。

「罰って世間の罰か。世間の罰だけじゃ、なにも変らんぜ」戸田はまた大きな欠伸をみせながら「俺もお前もこんな時代のこんな医学部にいたから捕虜を解剖しただけや。俺たちを罰する連中かて同じ立場におかれたら、どうなったかわからんぜ。世間の罰など、まずまず、

そんなもんや」

だが言いようのない疲労感をおぼえて戸田は口を噤んだ。

戸田は、自らの置かれた状況に鑑みれば、生体解剖手術をするしかないと開き直っている。手術前の心情と合わせて考えれば、世間の罰を恐れるより、彼は結局生体解剖手術によって自身の心情の変化如何を知るべく、嗜虐的になったのである。

上田の場合は、生体解剖手術に至るまで、不幸な人生に見舞われていた。妊娠した子供が腹のなかで死んで、子宮除去の手術を受けたため、女の生理を根こそぎ抉り取られた。浮気している夫への失望も加わり、ついに夫と離縁した。看護婦として、彼女は日本の勝敗や医学の進歩にまったく関心を示さず、ただ義務だけを果たし、言われたことをそのまま遂行していくに過ぎない。現に生体解剖手術以前、何ら抵抗感もなく、気胸患者を死なせかねない麻酔注射を浅田助手の指示で実行しようとしたのである。それを制止した橋本教授の奥さんヒルダ（ドイツ人）への抑えきれない嫉妬から、生体解剖事件にあたっては、同じ白人人種のアメリカ人捕虜にメスを入れることに躊躇はなかった。

上田と戸田は、それぞれの生い立ちや人生経験によって、自らの理性を失っている。抵抗するか否かのレベルでとらえられる勝呂と違い、二人の行動心理はそれぞれ別な次元で考えねばならない。戸田は麻痺していた良心を蘇生させるという逆説的な理由で生体解剖手術に加わった。上田に至っては、自身の不幸に由来する強烈な嫉妬・コンプレックスが暴走したため、歯止めが利かなくなった。

かくして、『海と毒薬』の登場人物に、様々な「戦中派」のタイプが含まれていることがわかる。「戦中派」に戦争責任はないと主張する村上兵衛のような人物に対応するガソリン・スタンドと洋服屋の主人もあれば、勝呂・上田・戸田のような人物も存在している。単純に加害者として片付けるガソリン・スタンドと洋服屋の主人に対して、自分の犯した罪を苦悩している勝呂は、加害・被害の両方に自覚している人物である。そういう意味で言えば、彼は遠藤のいう「共犯者としての悲しみ」を持っている。しかし、上田と戸田は、加害・被害の枠組みに収まりきれない人物である。無論この二人は結果として生体解剖にかかわった加害者だが、そのプロセスにおいて、彼等は自我を堅持できない多くの一般人と同じように、自身の感情や物事の成り行きに身を任せていた。もちろん上田と戸田の内面的葛藤は彼らの自我の一面であり、作中でも克明に描かれているが、生命尊重と患者本位の下で治療を行うべきだった医療関係者として、二人は結局身辺の状況に流されて生体解剖に関わっていく姿は、現実の「戦中派」の多くの人々の姿でもあろう。

とはいえ、三人はともに虚無感にとらわれていく。「どうでも良いような気がした。それを思うには躰も心もひどくけだるかったのである」と抵抗できなかった勝呂は思考停止を選ぶ。嫉妬に明け暮れる上田は、胸の締め付けられるような寂寥感や孤独な気持ちに陥っていく。そして、他人の苦痛や死に無関心な戸田は、自分の犯した罪に無感動になっていく。この三人を浸蝕している虚無感の問題をどうとらえるべきかは、『海と毒薬』を考察するにあたって、重要な課題になる。

四、『海と毒薬』から見るピラミッド型構造

勝呂・戸田・上田それぞれ個人の要素もさることながら、彼等に深刻な虚無感をもたらしているのは、戦時下のヒエラルキー社会にほかならない。『海と毒薬』の表象した世界では、階層社会のピラミッド型構造は、彼等の勤務している病院だけでなく、各自の人生のすべての段階にのしかかっている。

まず、F市の医大病院内において、西部軍・医学教授・医学生・看護婦・患者・アメリカ人捕虜は厳然たるピラミッド型の身分構造の基本階層をなしている。例えば、勝呂は学生時代から橋本教授を「一種神秘的な恐れと憧れとのこもった気持を感じるのだった」。上田看護婦にいたっては、「看護婦とよばれるわたしたちは下女のような役目」をしており、「教授や助教授という偉い先生たちは階級だけでなく、生れまでもちがう別世界の人」と感じている。教授と医学生、教授と看護婦のあいだに存在しているこうした絶対の上下関係は、生体解剖事件に関係した弱い立場の「加害者」を見る場合、重要なポイントになる。決して「君の自由なんだよ」、あるいは「断ろうと思えばまだ機会がある」といった簡単に割り切れるほどの話ではない。一方、弱い立場に置かれた「加害者」が自主判断を放棄する一面もある。例えば、橋本教授の手術で死亡した田部夫人に対して、勝呂は次のように考えている。

（今後どうしよう）と時々思うこともあった。（これが医者というもんじゃろうか。これが医学というもんじゃろうか）けれどもそうした事を考えるのも気だるかったし、考えてもわかりそうになかった。短期現役を明日にもひかえている現在、凡てはどうでもよいような気さえしてくる。

「時々思うこともあった」から「考えるのも気だるかった」や「凡てはどうでもよい」という状態に至る過程で、勝呂における思考の停止が見て取れる。生体解剖を引き受けた後、勝呂はさらに「考えても仕方のないこと。俺一人ではどうにもならぬ世の中なのだ」という諦念に陥っていく。つまり、下位が上位に絶対服従というピラミッド型構造の中において、勝呂は結局自身の主体性を放り出さざるを得なくなったのである。

さらに、同一階層にあるはずの者同士においても、身分の上下分化が進んでいく。大杉医学部長の親戚である田部夫人は、一階の大部屋にいる一般患者と違い、二階の個室が与えてられている。「一日に一度は女中と母親らしい人が風呂敷に食事を入れて運んでくる。すべてがあの大部屋の患者たちの世界とはちがっていた」。一方、田部夫人と好対照をなすのは、実験手術の対象になる施療患者の「おばはん」である。施療患者と呼ばれる病人は、経済的に貧しいため、無料で治療を受けられるが、そのかわりに実験手術の対象にされてしまう。従って、施療患者の「おばはん」は一般患者の中でも最下層に位置している。ところが、戦時中のため、施療患者よりも一段と低い階層が新たに出来上がった。敵国人のアメリカ人捕虜である。生体解剖手術の時、「コカインを使いましょうか」という浅井助手の意見に対し、「使わんでいい」、「こいつは

患者じゃない」と橋本教授が「怒りのこもった声」で応答した。つまり、アメリカ人捕虜は患者以下の扱いである。同じく患者だが、ピラミッド型構造の上位にある医学部長の親戚田部夫人と、一般患者、実験手術にされる施療患者・生体解剖手術に利用されるアメリカ人捕虜のあいだに新たなピラミッド型構造が生成されている。

そして、ピラミッド型の構造を追究する遠藤は、F市の医大病院から日本社会全体へと対象を広げていく。医学生戸田が引き合いに出されている。小学校時代に、同級生はみな教師に呼び捨てにされていたが、彼だけは「戸田君」とくん付けで声をかけられる。彼は医者の子、つまり百姓の子ではないに加えて、小学校で唯一上の学校に進学できる生徒だったからである。ところが、東京の子である若林稔が転校してきたことによって、戸田は危機感を募らねばならなかった。なぜなら、百姓の子に対して「優越感」を保てていた戸田は、身分の上では、東京の子に遜色するからである。つまり、百姓の子、地方の子、都会の子という目に見えないピラミッド型構造が子供の心の中で無意識のうちにしみ込んでいる。

その後成長した戸田は再び身分制社会に悩まされていく。男女関係を結んだ女中の佐野ミツの妊娠を知った時、彼は「こうした不始末を他人に知られまいという気持、一生をこんな娘のために台なしにしたくないということだけが」念頭でいっぱいである。社会的に低い身分の女中との関係は、医学生の戸田にとって不名誉なことだからである。戸田だけでなく、給料などの面で待遇がいい満鉄（南満州鉄道株式会社）社員と結婚した上田看護婦、橋本教授の姪と婚約した浅井、「町の有力者の娘と結婚できれば、なお良い」と考える勝呂などは、みなピラミッド型構造の中で上昇志向を持たねばならない。

一方、ピラミッド型の構図は、日本社会にとどまらず、日本対植民地・日本対外国の関係にも波及していく。植民地では、無論、支配者と被支配者の上下構造が存在している。例えば、上田看護婦の手記では、満鉄社員と結婚してから、植民地大連に向かった彼女の経験が綴られている。到着時に目に映ったのは、「ピストルを腰につけた兵隊に怒鳴られながら支那の苦力が痩せた四肢をふんばって大きな大豆袋を肩に背負い船に登って」いく風景である。そして、二か月もたたないうち、彼女は「日本人として一番はじめに覚えねばならぬことが満人にたいする態度だとわかって」きた。隣人の雑賀さんがボーイを罵る罵声が「怖かった」上田看護婦は、やがて自分も女中を理由もなく撲るようになった。のちに病院で圧迫される立場に立たされた看護婦は、植民地の大連では「満人」を圧迫していたのである。恐怖と暴力について、「未知な他者に対して、個体保存のための判断をするには、相手が自分より強いか弱いかが決定的だからだ。強いと判断すれば恐怖の感情が強化され逃亡する。弱いと判断すれば、怒りの感情が強化され攻撃を開始するのだ。相手との関係において暴力しか介在しないからだ」[14]という小森陽一の論考がある。上田看護婦と「満人」のあいだに、まさに小森の分析している暴力の発生メカニズムを適用することができる。

さらに、日本人の住むロシア風の建物や活気にみちる街に比べ、苦力、ボーイ、女中などの職業に従事する「満人」は、街のはずれや「穢い所」しか与えられていない。つまり、職業と住居の両方において、

「満人」と日本人の間にくっきりとした境界線が引かれている。こういう日・満の差別化は、「チャンコロ」という中国人に対する蔑称にも通じている。「中支ではな（中略）、実際チャンコロを解剖してその胆を試食した連中がいたらしい」と軍医が生体解剖手術室の前でもらしている一節がある。また、前記ガソリン・スタンドの主人は自分の傷跡を「これか。迫撃砲だよ。中支でね、チャンコロにやられてね。名誉の負傷さあ」と説明した場面もある。日清戦争後から使用しはじめたと言われる「チャンコロ」という差別用語に、明治維新期の「脱亜入欧」論や戦時中の「大東亜共栄圏」構想などに通底している日本優位・アジア諸国下位の考え方が含まれている。『海と毒薬』では、「チャンコロ」の使用は戦時中に限らず、戦後になってからも続いていることに注意すべきだと思う。

そして、同じ外国人のなかでは、敵国人のアメリカ人捕虜や被支配国民の「満人」の対極に位置しているのは、同盟国のドイツ人である。上田看護婦の手記に出てくるヒルダはその代表である。橋本教授の奥さんであるヒルダは、戦時下の食糧不足にもかかわらず、手製のビスケットを病院の患者たちに配ることや、濃い口紅と一般の日本人が入手不可能の石鹸を持つことができる。女性としてのヒルダは、従って「女の生理を根こそぎえぐりとられた」上田看護婦などの日本人女性の対極にもなる。ヒルダとのやりとりのなかで、上田看護婦は彼女を妬むようになる。遠藤は『死海のほとり』（新潮社、一九七三年）にも戦時中におけるドイツへの特別待遇に触れている。例えば、「私たちのいる大学は基督教のJ会が経営している大学だったが、神父たちはほとんど同盟国のドイツ人だったから、他の外人のように本国に帰還命令も出されず、日本人の教師と一緒にまだ教壇にたつことを許されていた」という一節がある。『海と毒薬』では、ドイツ関連のもの・ひとはとりわけもてはやされている。戸田の父がドイツで買った万年筆、チョビ髭をはやした将校が持っているドイツ製の写真機、そして橋本教授がドイツに留学し、ドイツ人のヒルダを妻として迎えたことなどにとどまらず、ドイツに行ったこともない勝呂と浅井の二人はそれぞれ、ドイツ留学を夢見、「一度あんな白人の女と寝てみたい」と思うようになった。一方、上田看護婦はヒルダへの嫉妬から、「白人の肌にやがてメスを入れる」衝動に駆られ、最終的に生体解剖手術にかかわっていく。

このように、西部軍からアメリカ人捕虜に至るまでをカバーする複雑な身分階級のピラミッド型構造が『海と毒薬』の中で紡ぎ出されている。この構造の下層に位置する施療患者や女中、アメリカ人捕虜などは、同構造の上層部に身を構える人々にとって、いとも簡単に切り捨てられる存在である。いわば身分社会から取り残された「棄民」である。白い人と黄色い人という人種の問題だけではなく、日本人と「満人」、さらには日本人内部における地方人と東京人の差別化などは、当然そのまま戦争末期における日本社会の世相を照らし出していると思える。

勝呂・戸田・上田など、それぞれ人生経験の異なる「戦中派」の人々が存在しているが、彼等に共通しているのは、ともにこのピラミッド型構造の戦時中日本社会に組み込まれていただけでなく、同構造の下層＝加害者でありながら抑圧される存在に従属させられたことである。この構造の本質を明らかにしない限り、村上のごとく国家への忠誠義務も許

容されねばならないと主張する人があらわれるし、勝呂のように、不本意ながらも生体解剖という犯罪行為を黙認せねばならないことや、流された上田・戸田のような人物は「加害者」になっていくのを未然に防げないこと、などが生じてくる。

終わりに

まとめてみると、遠藤は『海と毒薬』を通じて、生体解剖手術にかかわった個々の登場人物の加害の一面を当然避けていないが、それと同時に、戦時の日本社会全体を覆う、なおかつ日本人の心底に定着していたピラミッド型の構造にも目を向けているのではないかと思える。日本人の内部にとどまらず、日本人と「満人」、日本人と敵国のアメリカ人、日本人と同盟国のドイツ人などに見られるピラミッド型の構造を有する戦時日本社会への注目は、ある意味では、生体解剖手術にかかわっている登場人物を被害者の側面から表象していると言えなくもない。だから、現実の事件当事者から抗議状を受け取るのは心外だったかもしれない。彼はあくまで「戦後の戦争裁判によって戦争責任や戦争の罪の問題は既に処理され解決がついたという安易な気持はひそんでいなかったか。また平和運動や民主主義を行うことによって凡ては償われるのだという感情はなかっただろうか」との想定であった。そのため、村上兵衛「戦中派はこう考える」で提起された戦争責任否定に反対する立場で、やはり戦争責任の問題に絡み、登場人物の加害・被害に触れている。

結果として、いったん終息した戦争責任の論争は、『海と毒薬』の発表によって、九大生体解剖事件という特定の出来事に限定した範囲内で、再燃したと見ることができる。しかし、議論の中心は変わっている。『海と毒薬』と村上説の間では、戦争責任を否認するかどうかで分かれている。一方、『海と毒薬』と九大生体解剖事件の当事者・遺族たちの意見の間では、被害者の加害性を認めるか否かで決定的な差異がある。

以上のように、戦争や社会問題に目を向けていた遠藤は、『海と毒薬』を発表した後、堀田善衛の誘いを受けてタシュケントで開かれるアジア・アフリカ作家会議第二回の会合に参加していく。そして、『海と毒薬』に姿を現している外国への視点は、その後の遠藤作品にも踏襲されていくことになるのである。

注

(1) 山本健吉「らいぶらり――神のない人間の醜悪さ　遠藤周作著『海と毒薬』」(『日本経済新聞』、一九五八年四月二一日)や、佐古純一郎「罪を知らぬ精神風土『海と毒薬』」(『キリスト教と文学』(新教出版社、一九六五年)に所収)、上総英郎「海と毒薬」(『遠藤周作の世界』(朝日出版社、一九九七年)に所収)などがある。

(2) 遠藤周作「出世作のころ」(『読売新聞(夕刊)』一九六八年二月五日～一三日)を参照。

(3) 注(2)に同じ。

(4) 東野利夫『戦争とは敵も味方もなく、悲惨と愚劣以外の何物でもない』(文芸社、二〇一七年)を参照。

(5) 同書において、事件の最後の生証人として、「現場を知る立場にありながら、その誤解を解く努力をしてこなかった」と東野が悔恨の念をもらしている。

(6) 東野利夫『汚名「九大生体解剖事件」の真相』(文芸春秋、一九七九年)を参照。

（7）仙波と東野の恩師、鳥巣の夫、熊野の伯父はそれぞれ事件の当事者。

（8）当事者の身内ではない上坂冬子も『生体解剖　九州大学医学部事件』（毎日新聞社、一九七九年）において近い立場を取っている。

（9）吉本隆明の「前世代の詩人たち」（『詩学』、一九五五年一一月）、「「民主主義文学」批判」（『荒地詩集』、荒地出版社、一九五六年）と武井昭夫の「戦後の戦争責任と民主主義文学」（『現代詩』、一九五六年三月）、鶴見俊輔の「知識人の戦争責任」（『中央公論』一九五六年一月）、大熊信行の「未決の戦争責任」（同前、一九五六年三月）、吉本隆明と武井昭夫の『文学者の戦争責任』（淡路書房、一九五六年）などを参照。なお戦争責任の問題について、早くは一九四五年の新日本文学会の創立や翌年の『近代文学』同人による座談会「文学者の責務」（『人間』、一九四六年四月）などで取り上げられた。しかし、追求する主体の自己省察に始まらねばならない戦争責任の問題は、その後転向問題へと傾いていく。

（10）大熊信行「「戦中派」の典型」（『時事通信』一九五六年五月一四日）を参照。

（11）注（10）に同じ。

（12）臼井吉見「戦中派の発言」（『東京新聞』、一九五六年三月三〇～四月一日）、浅田光輝「戦中派の発言」（『読売新聞』、一九五六年五月七日）、中島健蔵「石筆」（『東京新聞』、一九五六年四月四日）、吉行淳之介「戦中少数派の発言」（『東京新聞』一九五六年四月一〇日～一一日）、荒正人「旧職業軍人の盲点」（『毎日新聞』、一九五六年四月二三日）、加藤子明「日本の気流――論説にみる一九五六年五月」（『知性』、一九五六年五月号）。他には安岡章太郎、奥野健男、大河内昭爾などの発言もある。

（13）遠藤周作『春は馬車に乗って』（文藝春秋、一九八九年）に所収。

（14）小森陽一『レイシズム』（岩波書店、二〇〇六年）を参照。

＊遠藤周作の作品からの引用は、『遠藤周作文学全集』（全一五巻、新潮社、一九九九年版）に拠った。